

音楽Ⅱ・音楽Ⅲ・総合芸術選択生へ⑥

音楽科 古川

調②

6回目は、各調の音階と調号についてです。前回の調と調名では調号の付く順番について解説しましたが、少し復習します。

#の付く順番は、「ファドソレラミシ」であり、#の数ごとに調名の頭文字を日本音名で考える**#公式「トニイホロヘ」**を使いました。#が1つであれば、ト長調(Gdur)、#が2つであれば、ニ長調(Ddur)、#が3つであれば、イ長調(Adur)というように調号の数で調を判別できるわけです。前回は#だけでしたが、#に対してbもあります。

bの付く順番は「シミラレドファ」であり、bの数ごとに調名の頭文字を日本音名で考える**b公式「ヘロホイニト」**を使います。bが1つであれば、ヘ長調(Fdur)、bが2つであれば、変ロ長調(Bdur)、bが3つであれば、変ホ長調(Es dur)というようになります。そして7つ目が付いた場合、全てシャープか、全てフラットなので#もbも「ハ」になるわけです。

全ての長調と短調のうち、音階が幹音で構成されているのは、Cdur(ハ長調)と amoll(イ短調)だけです。その他の調は全てその音階のうちに派生音を含んでいます。これらの調の音階各音を記譜する場合、派生音をそのつど臨時記号で示す手数、不便を除くために**調号**が用いられます。つまり、調号はある調の音階に含まれる派生音を一括して示すものであり、**調号によって規定される長・短調の音階各音を、その調の音階固有の音**といいます。調号は、五線の左端の音部記号の右隣りに記されます。調号の付いた位置の幹音と同名の音は、オクターブの高低にかかわらずすべて同じ派生音になります。

注意しなければならないのは、

和声短音階の導音、旋律短音階のⅥ音と導音は臨時に上げるので調号ではない。

つまり、音階固有の音ではないということです。

次に各調の調号とその主音を示すので必ず覚えましょう。

長調

C: G: D: A: E: H: Fis: Cis:

F: B: Es: As: Des: Ges: Ces:

覚え方には色々ありますが、私の場合、

例えば、上記の1段目、調号の#の最後の音が導音で次の音が主音と覚えている。

#1つはファ#なので次のソが主音だから Gdur。

#2つはファド#なのでドの次のレが主音だから Ddur。

理論的には調号の#が1つ増えるごとに主音が完全5度上に移る。

調号も Fis を第1番として完全5度上に増えていく。

それに対して、上記の2段目、

b1つは覚えるしかない。bは調号の一つ前の音が主音と覚えている。

b2つはシとミbなので最後の調号の一つ前の音はシbであり主音だから Bdur。

b3つはシミラbなので最後の調号の一つ前の音はミbであり主音だから Es dur。

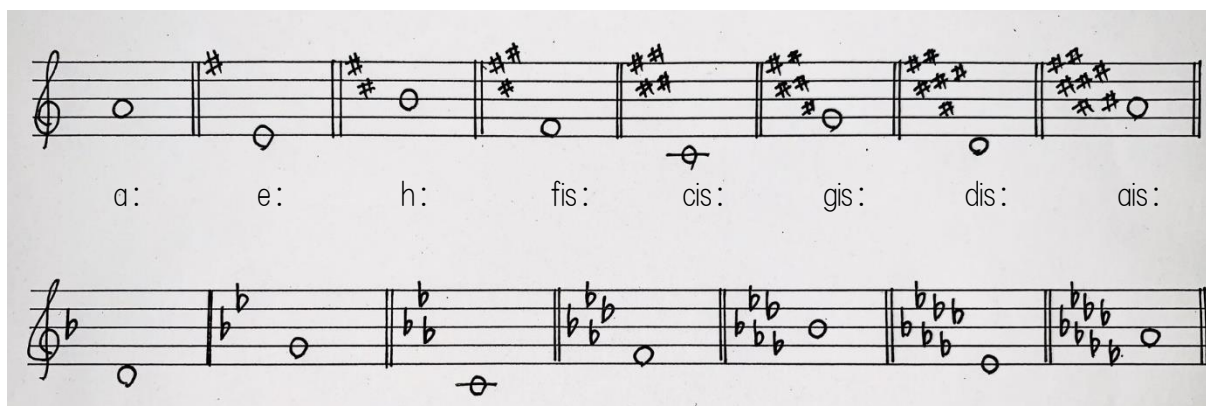
理論的には、調号のbが1つ増えるごとに主音が完全4度上に移る。

調号も B を第1番として完全4度上に増えていく。

上記のようにある規則を自分で作れば覚えやすい。他にも覚え方があると思うので自分が覚えられる方法で全て暗記し、そしてピアノで弾いてみることです。

また自分の専攻がピアノでない場合、専攻する楽器、または歌でこの調のスケールを練習しておくことは重要です。

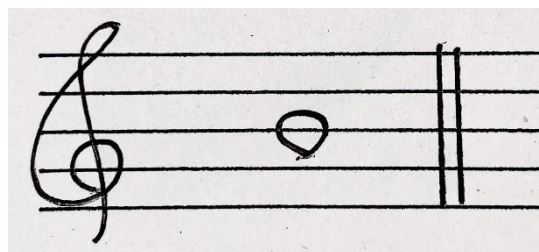
短調



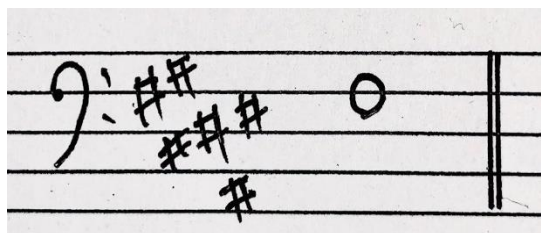
短調は長調の主音の短3度下の音が主音となり、調号は同じである。しかし、前回解説したが、自然短音階、和声短音階、旋律短音階の3種類がある。これも自分の言葉で説明できるようにしておいて下さい。用語や知識は言葉に出して実際に使ってみなければ記憶しにくいです。スケールを演奏しながら、これが自然、和声、旋律、その違いは理論で説明すると・・・という感じです。この先には調の相互関係が出てきます。これは長調、短調を理解していなければ分かりません。

では練習問題です。

○次の音を音階の第IV音にもつ長調の調号と主音をバス譜表上にし、調名をその下を書け。



シがIV音なので主音は4度下のファになる。しかし、主音と第IV音との関係は完全4度でなければならないので、ファはそのままで当てはまらない。シは指定なので変えられないので主音に記号が付くということになる。ファとシは増4度の関係にあるのでファに#が付く、完全4度となる。主音が Fis と確定されたのでこれは、



Fis dur(嬰へ長調)ということですよ。



次回からは調の相互関係に入ります。